

## 馬千里日記考 (3)

浜口允子<sup>\*1</sup>

### On the Diary of Ma Qianli (3)

Nobuko HAMAGUCHI

#### ABSTRACT

In the Fall of 1924, the newspaper *Xin Min Yi Bao* that Ma Qianli had been involved with for four years was about to cease publication. As Ma searched for new ways to pursue his goals, he became involved in the movement for a National Congress. The movement to establish a National Congress, which was touched off by Sun Yatsen's "Heading North" declaration, developed very rapidly in 1925, and it is often evaluated as a prelude to the National Revolution. This article will use material from Ma Qianli's diary to examine the nature of the National Congress movement in Tianjin—including the background of the movement, how it was organized, what goals it pursued, and whether there were special characteristics of the movement in Tianjin. The article will also explain the role Sun Yatsen played in the development of the movement, the relationship to the negotiations over national reconciliation promoted by Duan Qirui, and other issues.

#### 要旨

1924年の秋は、馬千里にとって、それまで4年にわたって続けてきた『新民意報』の刊行が、まさに終焉を迎えようとしていたときであった。そうした事態の中で、馬千里が次に希望を見出し、取り組んだものが国民会議運動である。国民会議運動とは、孫文による「北上宣言」を直接の契機として始められ、1925年にかけて急速な盛り上がりを見せたことにより、「国民革命の先駆け」と評価されている運動である。本稿は、天津における国民会議運動が、どのように発起され組織されたか、運動が求めたものは何か、そこには如何なる特徴がみられたかなどを、「馬千里日記」を中心にしつつ、当時の時代背景とともに描き出したものである。またその過程で、孫文が果たした役割や、段祺瑞による善後会議との関係などについても言及した。

馬千里 (1885~1930)

教育者、社会活動家。名は仁声、天津の人。北洋大学露文専科卒業 (1906)。次いで上海振華学校 (1907)、天津南開中学 (1908) の英文、数理を卒業。張伯苓の推薦により南開中学教員 (1912)、直隸女子師範監学 (1915)。1917年天津教育考察団に参加して日本を視察訪問。1919年五四運動に際して天津各界聯合会副会長、日貨排斥委員会主席。1920年1月運動のなかで逮捕、7月釈放。9月『新民意報』を創刊。1921年達仁女校校長。1923年葉王廟小学校長、天津教育局第一区教育委員。1924年直隸省教育会委員。天津国民会議促成会運動の中心メンバー。1925年天津県議會議員、参事会参事。1927年中国国民党に加入、28年党務指導委員会委員。南開校友総会天津分会主席、天津赤十字会幹事長、副会長。1930年3月1日病没、享年45歳。

<sup>\*1</sup> 放送大学名誉教授

## はじめに

1924年の秋は、馬千里にとって、1920年以来4年余にわたって続けてきた『新民意報』の刊行がまさに終焉を迎えようとしていたときであった。そもそも『新民意報』の発刊は、振り返ってみれば、1919年の五四運動を経て20年代に入ったとき、馬千里らがそれまでの既存勢力に対抗するため、都市内部に新しい仕組みをつくるべく「国民大会」の結成に努めたのだが、運動の中で逮捕され長期間拘束されたため成果を得ず、そうした切実な体験によって、釈放後は何よりも先ず多数市民の意識変革こそが必要であり、そのためには新聞の発刊が欠かせないと認識したからであった。だがそうした新聞の刊行も、24年末になると財政基盤の面でも、人的構成の面でも力を欠き、停刊のやむなきに至ったのである<sup>1)</sup>。では、1920年代半ば、そのような事態の中で馬千里は、次に、何に希望を見出そうとしたのであろうか——。これが本稿の問題意識である。

「馬千里日記」を見る限り、その希望のシンボルとも言うべきものが「孫文」と「国民会議」であったと思われる。そこで本稿は、「馬千里日記」を中心として、これまでほとんど明らかにされてこなかった天津における国民会議運動と、その背景をなす天津社会の動向を馬千里とのかかわりで見ていくこととする。

では、初めに、国民会議運動について述べておこう。国民会議運動とは、民国期を対象にした場合、必ずしもこの時期の運動のみを指すとは限られていない。この名称が辛亥革命期にも使われていること、また1930年代にも陳独秀によってその重要性が主張されていることなどについては、既に菊池一隆氏が指摘しているところである<sup>2)</sup>。だが、本稿で取り上げる国民会議運動とは、1924年秋にはじまり、国民革命の先駆けともなった運動であって、特に孫文によって11月10日に発せられた「北上宣言」が、直接の契機となったとされている一連の運動である。その意味で孫文の「北上宣言」は「国民革命の始まりを告げる記念碑的文書」と評価されてきた<sup>3)</sup>。「北上宣言」と同宣言に至る経緯、その政治的背景をなすものは、ここに取り上げる国民会議の歴史的位置を定めるに当たって重要である。即ち、1924年1月、中国国民党は第一回全国代表大会に際して改組され、第一次国共合作が成立した。この事態は、帝国主義と軍閥を打倒し、労働者、農民を解放するという国民革命の考え方が、党の基本政策となったことを広く全国に示したものであった。そのため、1924年9月、第二次奉直戦争がおこると、国民革命の考え方から影響をうけた馮玉祥が奉天派の張作霖と停戦して直隸派に対抗し、10月23日、大總統曹錕を幽閉して北京を占領するという所謂「北京クーデター（北京政変）」を敢行した。しかもそのうえで、自軍を「国民軍」と改称し、南北統一を目指して、10月25日、孫文に通電し北上を要請したの

である。上記「北上宣言」とは、この要請を受け入れた孫文が、11月10日、北へ向けて広東から出立するに先立って発出した宣言である<sup>4)</sup>。孫文はこの中で、これからの時代は国民革命の時代であること、そうした時代を招来するためには、反帝反軍閥掲げて「国民会議」を招集し、そこに結集された国民の力をもって中国の統一と建設を図ること、そのためには先ず様々な団体を糾合して国民会議の予備会を開くことが必要だ、と呼びかけたのであった。つまり孫文は、この肝要な時に、人々の真の意思を代表できるものは国民会議のみであり、そこで人々の意志を明確に表明し、そうすることで軍閥政治に終止符を打ち、中国の統一と建設をはかろうと考えたのである。そして、そうした国民会議を招集するためには、その前に、実業団体、商会、教育会、大学、各省学生联合会、工会、農会、曹錕・呉佩孚に反対する各軍、政党という9つの団体の代表による予備会議を開いて、基礎条件、召集時期、選挙方法などを定めることが必要だとしたのである。また孫文は、これからの国民革命という新時代には、武力を国民と結合させて国民の武力とすること、武力は国民の利益を守り、その障害を除くためにこそ用いられるべきであるとし、そのための方途についても述べたのであった。孫文が、この時、北上の暁には自らの主張が本当に実現されるであろうと考えていたかどうかについては疑問が呈せられている。しかし、やはり中央で自身の政治主張を広く訴えたいと考えていたことは間違いない。孫文は、そうした考えを北上の途中立ち寄った上海や長崎、神戸でも繰り返し語り、国民会議開催への支持を訴えたのであった<sup>5)</sup>。

ところで、国民会議の開催という戦術については、同時期に他にも幾つかの系譜の中で同様の提起があったとされる<sup>6)</sup>。北京における張紹曾による国民会議の呼びかけ、共産党による「第四次時局に対する主張」上の提唱、北京の学生連合会による提起などがそれである<sup>7)</sup>。しかも、そのなかで特に注目される観点は、共産党側は孫文が北上した際、北京で「軍閥との妥協」を行なうのではないかとおそれて、それを未然に防ぐために「各地で人民団体と連絡を取って国民会議促成会を組織すべし」としていたとの指摘である。要は、当時、錯綜する政治状況に対して、国民に基盤を置き、国民各層を結集した何らかの組織が必要だという見解が広く醸成され、それぞれに主張されていたのだといっていよう。それは、先ず上海において始められ、ついで北京および各地へと拡がっていった。そのため国民会議運動に関するそうした状況については、少なからぬ研究がある<sup>8)</sup>。だが、天津の運動については、先にも言及したように、これまでほとんど明らかにされていない。そこで以下には、可能な限り、天津及び馬千里に焦点を絞り、国民革命の先駆けをなす国民会議運動について、実際の状況をみていくこととしよう<sup>9)</sup>。

## I. 1924年秋の天津社会

「馬千里日記」を見るかぎり、1924年秋から25年春にいたる間、天津において国民会議（促成会）運動が広範に行なわれたことは明らかである。しかも、先述したように、この運動は、孫文による「北上宣言」を契機として展開されたため、天津は日本を經由して北上した孫文が最初に上岸し、その後年末に北京へ向けて移動するまで滞在したところとして、国民会議運動の展開を見るに際して欠くことができない意味ある地点と考えられる<sup>10)</sup>。またこの地は、五四時期に周恩来、于方舟らが活動し、同時に鄧穎超が強いリーダーシップをもっていた都市であるため、国民会議運動についても、中国共産党や女界が先端的運動を展開する基盤をもっていた。したがって、そうした人々との関連においても、馬千里の動向は注目に値すると考えられよう<sup>11)</sup>。実際天津は、五四時期の国民大会という経験もあり、馬千里らが、様々な団体の間で連帯や組織化を考える素地は充分にあったといえる。そうした相互関係を明らかにするためにも、この間天津の運動に一貫して取り組んだ馬千里の日記は、最も基層の状況について知る貴重な資料的意味を持つものであった。

### 1. 「馬千里日記」が語るもの—1924年10月

1924年10月下旬は、馮玉祥による北京クーデターによって曹錕が辞任し、呉佩孚も前線を離れて天津にもどったため、直隸派が総体として大きな打撃をうけたときであった。だが、天津では、なおも呉佩孚傘下の軍が専横な行動を取っていたことが、同時期の馬千里の日記から明らかである。以下には、同「日記」の中から関連する記載を抜粋することで、1924年秋の天津の社会と、そのなかにおける馬千里らの動きをみておくこととしたい。

- ・ 10/29 夜10時、新民意報館が直系軍によって封鎖された。鎮守使衙門の兵が一階、二階にいたものをみな縛り上げて連れて行った。全部で18名。李仲吟、顧俊霄、李伯勳らと印刷工である。戒嚴司令部へいくと李らは手錠をかけられていた。理由は、新民意報社が代行印刷していた『民新報』が「呉佩孚が逃亡した」という類の号外を出したため奉系に通じているという嫌疑をかけられたのである。だが、もし奉系に通じていたのなら、これほどまで困窮することはなかったであろう。実際のところ、奉張（張作霖）であろうと、皖段（段祺瑞）であろうと、直呉（呉佩孚）であろうと、我々は賛同しない。なぜなら、これらの軍閥は民国の禍であるからだ。民治の国家はこうした軍閥政権であってはならない。専制的な軍閥による政権を許してはならない。
- ・ 10/30 新民意報館が封鎖されたことをうけて、

周拂塵が、私に、数日の間、租界に避難するよう忠告した。私は笑って応えず、だが学校に置いてあった眼鏡をポケットにいった。捕らえられて眼鏡を壊されたとき代わりにするためである。

- ・ 10/31 鄧穎超より電話で達仁女校も混乱しているという。多くの家長たちがやってきて学生を引き取っていったとのこと。学校へ行き、明日、明後日と休校にすることをきめた。それから専ら逮捕者の釈放のために走り回った。

### 2. 「馬千里日記」が語るもの—1924年11月

直隸派が敗北したことによって、11月1日には顔惠慶内閣が辞任し、2日には曹錕も辞任を迫られ、その後には馮玉祥と親しい黄郛が代理総理の地位についた。だが黄郛内閣はこの月のうちに総辞職し、代わって段祺瑞が11月24日執政の位置についたが、その準備の場は主として天津であった。天津では、折しも段祺瑞に連なる反直隸派の人々が集い、賄選による国会をどうするかなどについて検討を行っていた。孫文が「北上宣言」を發出して国民会議を提唱するのは、天津がまさにこうした状況のもとにある時であった。以下の11月前半の日記からは、このような錯綜した政治的配置のなかの、中央の動向と末端社会の間に、些かの落差があることを感じるであろう。また、そうした社会状況下における馬千里の心情や判断、そして周辺の人々の生活のあり様なども読むことができよう。

- ・ 11/1 逮捕された李仲吟らの身元保証のため署名活動をするが、連座することを怖れて応じないものがある。フランス租界に宋則久を訪ね、劉鉄菴を訪ね、話し合う。戦いの砲声が聞こえ、26師団はすでに力を失い敗退しているという報が伝わるが、真偽のほどはわからない。
- ・ 11/2 町には敗残兵が多い。多くは敗れた26師団だ。我が家と遠からぬ元緯路、黄緯路、五馬路は全て敗兵で埋めつくされている。妻と子供は張伯茶宅に避難した。私は達仁女校や紅十字会に行き、緊急会議を開き、今夜騒乱が起こる場合に備えて救急3隊を組織した。だが討逆第4軍司令部は去り、省長の門衛もいなくなり、戒嚴司令部もなくなってしまった。
- ・ 11/3 朝8時学校へ行く。保安警察が路上で武器をもつ敗残兵を見つけると、その武器を押収していた。街には敗兵が次から次へと現われ、みな南へ向かっていった。呉佩孚は昨夜11時に車で塘沽へ去った。その後については諸説あり、北へ向かったとも、汽船で南下し長江方面の督軍と連携したともいうが不明。午後馮玉祥の軍が入ってきて新駅方面へいったとのことだが、夜は静かで一兵もみえない。老鉄橋付近は日本軍が守っている。学校はまだ開学できない。
- ・ 11/4 達仁女校に行き、用務員に大きな3枚の

黄紙を用意させ、赤い字で「慶賀国民軍戦勝」と大書し門外の扉に貼らせた。また国旗を門口に掲げさせた。鈴生は賛成できない模様。劉鉄菴に電話して李仲吟らが昨晚釈放されたことを知った。宋則久の家に行き宋、李、李、劉、顧らと「国家処理法」について検討した。1元老会議、2国民大会、3慶督裁兵、4財政公開、5実行法律について。午後張伯苓の家に行き避難していた妻や張伯苓と話した。

- ・ 11/5 達仁女校にいくと、昨日掲げた国旗も、貼った紙もみな無くなっていた。門衛に問うと王鈴生がそうさせた由、私はまた旗を掲げさせた。(撤去の)理由は、彼が馮玉祥に不賛成で、いずれ呉佩孚が戻ってきてまた覇を唱えるかもしれないからとのこと。つまり私に反対なのだ。午後教会へ行き救国聯合会を開く。30余名が出席し、宋則久と私が書記となり通電文を起草した。妻は帰っていた。
- ・ 11/7 天津には今日奉天兵が到着した。張宗昌、呉興新の兵も。王承斌も23師団の兵を募った。これらはみな私心の問題だ。馮玉祥が北京で痛快な人事をした。宣統帝溥儀を宮廷から出し、皇帝の称号を廃したのだ。これで二度と宣統16年などの年号を使わないですむ。
- ・ 11/8 朝7時、遠くから銃声。奉天軍が来て列車の1両目で失火し9車両が燃えたという。達仁女校はまだ授業が出来ない。『新民意報』に国会解散論を書く。
- ・ 11/9 北京政府は様々な人物の職を免じ入れ替えている。(詳細略)天津は張作霖が来るということで厳戒態勢で交通を遮断している。こんな不便をかけてこれが民国の官吏か。今年の今日はこの勢力だが、来年の今日は一体どう変わっていることか。
- ・ 11/10 達仁女校は授業が復活した。先生たちもみな来たり、学生も70余人登校した。午前11時、張作霖が天津に来たため交通が途絶し、学生は昼食のために帰宅することができなくなった。
- ・ 11/12 昨日と今日、また厳戒態勢となった。さすが奉天王、直隸に来ては王様だ。奉天軍は23師団を力で解散させ、王承斌は辞職した。
- ・ 11/13 帰宅途中出会った李体乾によると、省教育界の呉、張らメンバーや、商会の下月庭らは互いに協議して王承斌を攻撃し、李景林を歓迎して省長に迎えようとしている由だ。全く恥知らずだ。特に曹系がひどい。
- ・ 11/15 昨今の出来事は本当に重苦しく気持ちが晴れない。張作霖、段祺瑞、馮玉祥の会談内容は外部からはわからず、謠言のみ多い。張作霖の奉天軍がすでに北倉の楊村で馮軍と一戦交えようとしているとさえいう。張仰や許肇銘は自分の地位保全を図るために、最初から臆面もなく奉天軍を歓迎し、李景林を省長にし、王承斌を駆逐しよ

うとしている。

さて、以上の「日記」からは、天津社会に軍閥混戦ともいべき変化が続き、天津政治が翻弄されている様子を見て取ることができるであろう。そのなかで馬千里がどの程度敏感に政局の動向をつかんでいたかについては、その置かれていた時々々の立場によって違いがあり必ずしも一様ではない。だが、少なくとも24年秋は、馬千里自身が新聞『新民意報』を刊行していたこともあり、概して時局に関する情報の受け取りは早かった。24年10月23日の馮玉祥による北京政局についても、謠言といいながらも即日把握しているし、同24日にはそれが何であったのかを正しく知っている。また曹錕の命運についても、25日には「曹錕は昨年は黎元洪を追ったが、今回は自分が辞任させられることとなった。まさに“因果はめぐる”だ」と切り捨てている<sup>12)</sup>。同様に呉佩孚の反撃についてもその推移をよく伝えている。要は、天津にはそうした影響が直接及んでいた故であろう。ただ注目すべきは、10月29日に述べているように、馬千里が軍閥に対して全く幻想を抱いていないことである。「奉張であれ、皖段であれ、直呉であれ、みな不賛成だ」といい、「軍閥は民国の禍であり、民治の国家は軍閥が携わるものであってはならないし、軍閥政権であってはならない」と強調している点は、馬千里の政治的立脚点を示すものとみてよい。そして、11月に入ると、目前で呉軍が去り、馮軍が入ってくるという大きな時代の転換を経験する。11月4日の「日記」にある「3枚の大きな黄紙を求め「慶賀国民軍戦勝」と大書した」という件は、この時代なればこそその歓びの感情の発露であろう。そしてその後の経緯を、日記にはないが簡単に述べると、張作霖、段祺瑞、馮玉祥の3人が会談した件は11月10日に天津で行なわれたのだが、この時段祺瑞は和平を主張し、張作霖、馮玉祥は兵を用いることを主張したのだという<sup>13)</sup>。そして、11日には王承斌が天津の各方面から迫られて辞職し、12日には奉天軍の李景林が呉佩孚の残党を王承斌が23師団に編成したものを包囲し、王はやむなくイギリス租界へ避難した。李景林は馮玉祥がおさめた呉軍の20師団も解散させ、改編し、その上で省長の職につくと、直隸を治めるべく各官庁の人事を全て変更しようとした。そうした状況の中で、馬千里は自分が身をおく教育界の現状と天津各方面の右往左往する有様、浮き足立つ役人たちを凝視している。この時期の日記が強く語りかけてくることは、軍閥間の戦いが天津の市民生活に与えている影響の大きさである。そこには生命の危機に加えて、交通の途絶、教育の中断などが生じている。また租界という「安全地帯」のもつ意味が察せられる。

### 3. 孫文の北上と歓迎準備の日々

他方、孫文は、11月10日「北上宣言」を發したのち北上の途につき、上海では国民会議に政治生命をか

けると述べた<sup>14)</sup>。更にそこから訪れた日本の長崎、神戸では、国民会議のもつ意味、目的、中国の課題との関連などにふれつつその重要性について講演した<sup>15)</sup>。孫文によるこの政治主張に対しては、従来中国共産党は警戒感を示していたのだが、この段階になるとむしろ国民会議運動に賛同し、その方向に積極的に傾斜していったという。そのため上海では、早くも11月26日には国民会議促成会が発足し、ここから大衆運動へと勢いを加速したとされる<sup>16)</sup>。

だが、同時期、天津社会とその中での馬千里らの動きは、むしろ専ら孫文歓迎という形で展開されていたといえる。そこで以下には、孫文が実際に天津に上陸する12月4日までの、慌しい、しかし何よりもそこに希望を見出そうとする彼らの準備状況を「日記」から抜粋して採録する。個人の日記ではあるものの、そこからは、こぞって孫文に期待する事態の進展を読み取ることができるであろう。同様に、この頃が末端における国共合作の実体化が進んだときであり、文字通り様々な勢力が協同を模索していた時であったと実感する<sup>17)</sup>。

- ・ 11/18 午後宋則久の家に行き、王代青、劉鉄菴、李仲吟らと馮玉祥の公館へいき馮と面談した。政変の状況や会議の状況について問い、最後に孫中山先生と合作してほしいと力説した。
- ・ 11/22 謙小 が訪ねてきて、天津市民の孫中山先生を歓迎する籌弁処を發起したいと言った。私は賛成して加入し、そうした動きを新聞に載せること、学、商、農界にも参加を促すことを決めた。段祺瑞と馮玉祥は今日北京へ行き、段は24日に臨時執政の位置につく。張作霖は明日北京に来る予定だ。
- ・ 11/23 朝、直隸省教育会へ行き、臨時に全体委員会を開いて、教育会が孫中山先生歓迎大会に参加することを決めた。午後2時、鄧穎超、于方舟が来た。国民党直隸省党部の歓迎会について話し合い、合作について合意した。
- ・ 11/24 10時、教育局へ行くと何人もの人が待っていた。孫中山先生歓迎の件についてである。夜、天津県教育会で歓迎準備会を開いた。
- ・ 11/26 午後3時新民意報社へ行き劉鉄菴と話し、孫中山歓迎に賛同して加わるという社への書信が極めて多いということを知った。商会に行き卞月庭に会い、商会が歓迎会に敢えて加わらないということを知った。理由は張作霖や馮玉祥が皆歓迎に来るからとのことだった。
- ・ 11/29 午後、天津市民の孫中山先生歓迎準備会が学界倶楽部で開かれた。夜11時散会した。  
1924年12月
- ・ 12/1 午後2時、県教育会館に行き(歓迎の)小旗や入場券の分配について確認した。3時に江著元の家に行き一緒に張園の孫中山先生歓迎処にいった。



- ・ 12/2 夕方から国貨販売所に集まって十人会議を開いた。宋則久、劉鉄菴、魯嗣香、宋朝義、鄧穎超などが集まった。席上、鄧、魯、宋が話をした。
- ・ 12/3 教育庁に行き、孫文の演説の日には各学校を半日休校とすることを要請した。維持隊隊長王南俊と会い維持隊の仕事の分掌を相談した。午後、新民意報社で、江著元、于方舟とともに汪精衛と面談した。汪は(孫文が)なるべく多くの民衆と会えるよう大きな会場を希望し、我々は南開学校操車場に行ってみた。また張園へ行き、許世英等に会った。

以上の「日記」からは、11月後半から孫文到着の前日である12月3日まで、天津では、間近に迫った孫文の到着を歓迎するために、様々な準備が進められていた様子がわかるであろう。

その一つが「孫文来る」の事実を広く市民に伝達しようとする広報活動であった。天津『大公報』の11月23日、24日、26日、27日の公告欄には、孫文歓迎の公告が載せられ、その連絡先としては「新民意報館馬千里先生、大公報蔡叔瑜先生、日租界熙來大飯店余寄文先生、女星学校李崎山先生」が指定されている。(上掲図参照) そのため、この公告に対して多くの手紙が寄せられたのであって、上記「日記」の11月26日に「社への書信が極めて多い」とあるのはその意味であろう。この時期天津では、孫文の北上が市民によっても広く待たれていたことがうかがわれる。そして何より歓迎計画が着々と整えられていたことが、相次ぐ歓迎準備会の開催という事実により明らかである。

例えば、第一に、「日記」11月24日にある「歓迎準備会」とは、天津反帝大聯盟、學術講演会、印刷工界聯合会、京漢鐵路総工会、国民党直隸省党部、天津市民党部、新民意報社など41団体代表50余名からなる第一次孫中山歓迎準備会のことである。会議は江著元が主宰し、于方舟が書記を務めたほか、鄧穎超、宋朝義

ら8名が連絡員になり、謝宝光、史漢青ら8名が庶務員になって孫文歓迎の各種準備工作を行った。馬千里はこのとき江著元とともに孫文との交渉に当たる担当となった<sup>18)</sup>。

第二に「日記」11月29日にある「孫中山先生歓迎準備会」とは、200余名が参加しておこなわれた第二次準備会のことである。この日も江著元が主席を務め、孫文の日程や歓迎の準備状況を報告し、特に以下の項目について討論するよう要請した。即ち、(1)孫文に提起する8か条について——①廢督裁兵、不平等条約の取消し、民国成立以降の合法ではない法令を取消すこと。②曹錕の私産および官僚の不法私産を公のものとし、水災、旱災、兵災からの救済用にすること。③領事裁判権や租界など中国における外国の力を排除すること。④一切の苛捐雑税を取り消すこと。⑤教育の原状を回復すること。⑥国民会議は代表大会宣言および政綱を徹底して実行すること。⑦国会を解散し、偽憲法を取消し、將軍府を取消すこと。⑧大規模に三民主義の宣伝をおこなうこと。——(2)代表として馬千里、宋則久、劉鉄菴、崔呂鶴、鄧穎超、汪志清、史漢清、魯嗣香、宋朝義ら10名を推挙し孫文と会谈することについて。(3)歓迎のスローガンは「孫中山先生万歳」「国民会議万歳」「国民革命万歳」とすることについて。(4)孫中山先生に錦旗を贈り、そこには「全民衆を代表して奮闘されんことを」と上書することについて。(5)経費の問題は自由な寄付によることとし、受付地点は新民意報社、担当は劉鉄菴とすることについて。(6)警察、巡捕、憲兵との対応は張寺農、魯嗣香が当たることについて、などであった。ここからは、彼らが何を求めていたか、いかに孫文の北上に期待していたかという参加者たちの意気込みを見ることができよう<sup>19)</sup>。

尚、これまでの日記の抜粋から明らかなように、「馬千里日記」にはこの段階まで、「国民会議」という名称は全く記されていない。だが、ここに「国民会議万歳」というスローガンを採択していることからみて、馬千里らが、孫文歓迎の内実として、国民会議の主唱こそ全ての運動の鍵であることをよく理解していたことが判明する<sup>20)</sup>。天津ではまじかに迫った孫文の來津にむけて、国民会議運動への準備態勢が万端整えられていたと言ってよいだろう。尚、「日記」にはないが、12月1日には于方舟の主催による中国国民党天津市党員大会が開かれていた。そこには200余名が参加し、孫文の北上について話し合い、歓迎準備として全体党员を維持隊と宣伝隊に分け、組織をつくって組長を決め、機動的に動くことなどを定めたほか、于方舟は国民党通訊社を立ち上げ、孫文の演説を逐次発表していくことを提起していた。于方舟は、おそらく、孫文來津というこの機会を捉えて国民会議を開くことを目指していたのであろう。更に加えて、この機会に国民党を發展させ、その中の覚悟の高い人材を共産党へ加入させようとしていたと考えられる<sup>21)</sup>。

#### 4. 孫文到着の日—1924年12月4日

1924年12月4日、孫文が天津の埠頭に到着した日のことを、馬千里の「日記」は次のように記している。

・12/4 朝早く学界俱樂部へ行くと間もなく各界代表4・50人が来た。11時半北丸が到着、群衆からは万歳の声があがり絶えることがなかった。孫文は張園へ入り、私は江著元、于方舟と張園へ赴き、張謙、王法勤、汪精衛と孫文の演説について相談した。夕方国民大飯店で一行の歓迎会を行なうことについては、租界工部局は初め拒否していたが後許可した。だが、9時汪精衛と孫科がきて、孫文は病のため出席できないとのことであった。食後汪精衛と話し合い、明日の演説も延期することとした。

12月4日の孫文來津については、『益世報』『大公報』などに詳報されているが、その他にも幾つもの記述がある<sup>22)</sup>。

それらによると、港に集まった市民団体は以下のとおり広範におよび、極めて盛況であった。直隸省教育会、天津県教育会、中華自治協會、団体代表会、直隸省農會、京漢路總工会、京奉路總工会、天津学生聯合会、国民外交協會、反帝國主義運動大聯盟、西北殖民同志社、學術講演会、女星社、天津学生同志会、公民救国犠牲団、救国聯合会、天津県教育局、基督救国会、福建同郷会、広東同郷会、安徽自治協會、湖南劳工会天津支部、安徽同郷軍政聯合会、市民救国会、青年救国団、學術研究会、青年同志社、社会科学研究会、津保青年社、天津印刷工界聯合会、青年文芸社、天津良心救国団、天津同志新劇社、国貨售品所、青年社、律師公会、志誠救国団、中華青年同志会、江浙旅津ミシン同業会、英文学生会、婦女日報社、新民意報社、建国日報籌備処、車馬路基督教会、平民教育第一、二喚醒団、模範学校、河北大寺小学校、江西自治協會、新中国通信社、捷聞通信社、明星通信社等。そして参集者は数万人に上り、そこには「歡迎孫大總統」「歡迎孫中山先生北上」とともに「打倒帝國主義」「打倒軍閥」の幟がみえたという<sup>23)</sup>。また宿舎の張園にいたる沿道にも市民の盛んな歓迎がみられ、そのため警備は手厚く、50名からなる警備隊が6隊も出動したほか、フランス租界通過の際はフランス拳銃隊が警備し、日本租界に入ると日本拳銃隊が交代してこれに当たったと記されている<sup>24)</sup>。

## II. 天津における国民会議促成会の形成と展開

### 1. 運動のはじまり

孫文を迎えたものの、孫文は病床にあって運動を共有できない状況の中、12月8日の日記に「国民会議」という言葉が初めて登場する。「国民会議促成会を發

起しよう」というものであった。その理由は、この日孫文が「宣言書」を天津『益世報』に発表し、「最小綱領」即ち、当面何をなすべきかという目標として国民会議の召集を公に明示したからであった。それは、孫文が11月10日の「北上宣言」において提起し、日本を経由する旅程のなかで度々言及してきた国民会議の開催を、この日、天津の人々に対しても「目前の時局の必要のため」として呼びかけたものであった。馬千里らは、そこに、直ちに実行に移すべき重要課題を見出したのである。12月8日の日記は、そうした馬千里らの切迫した思いを反映したものと見えるであろう。以下には、この日を含め、前後する「日記」のなかから関連部分を取り出して掲げる。これが天津における国民会議運動のはじまりであった。

- ・12/6 李仲吟、宋朝義、鄧穎超とともに張園へいくと宋則久、魯嗣香が待っていた。暫らくすると汪精衛が我々に会い、孫中山の病状について話した。その際、宋則久が南北政府の優劣について尋ね、魯嗣香が広東商団と政府の衝突の詳しい状況について尋ねると、汪精衛はこれに答えた。
- ・12/8 午後、新民意報館で江著元、于方舟と会い、数人と連絡して国民会議促成会を發起しようと相談した。
- ・12/15 午後、江著元、于方舟がきて歓迎会は打ち切りにしようと話した。明日庶務員会議で決め、18日の全体会で孫中山が年内に講演することは無理だと報告することにした。
- ・12/18 午後、江著元、于方舟が訪ねてきて、国民会議促成会の發起会について検討した。午後8時、学界倶楽部で孫中山先生歓迎大会及び国民会議促成会準備会を開催した。
- ・12/27 夜、国民会議促成会準備会を開いた。
- ・12/31 昨夜来の大雪、寒い朝、鄧穎超と駅に行った。11時孫中山の車が来て、5分で出発していった。

では、12月8日、孫文により発表された「宣言書」とは何であったのか——。それは、天津におけるその後の運動の指針となったものとして重要であるところから、その大要を以下に記す<sup>25)</sup>。

「三民主義はわが党主義の唯一の基礎である。わが国の問題を恒久的に解決するためのものである。だが現在私が準備しているものは最小綱領であって、目前の時局の必要のためのものである。対外政治については、帝国主義が中国に加えている不平等条約と協定、そして中国を経済的な隷属的状况におとしている契約などを即刻廃除しなければならない。対内政治については、中央政府と省政府の権限をはっきりさせ、地方自治政府の基礎を築くことが必要である。そうすれば以下のような結果を生み出すことができるだろう。

①中国と諸外国の間の国際的關係が平等になり、わが国の財政や生産を發展させることができる。②実業

や財政が發展する。農業經濟が新たな動力を得、農民や労働者の經濟狀況が進展する。③労働界が進展し、労働の質量が増強され生活が改善される。④農民や労働者の經濟狀況がよくなり商業が盛んになる。⑤国家財政が發展し、教育文化の問題が解決され、知識層への需要が増す。⑥在華領事裁判権が廢除され、わが国の法律が全国で行使される。こうすれば、復古運動や反革命運動も民国のために利益を図るものに転化していくだろう。13年間、軍閥と帝国主義の連結が上記の目的と願いを阻む障害であったが、それが打破されるだろう。(中略) 吳佩孚を打倒したいまこそ最小綱領を実現したい。それは人民自身の求めに応じて、一切を公決することである。国民党は国民会議を召集するよう提起している。国民会議の主要任務は、国家の統一と建設を図ることにある。ただ国民会議を召集する前に、予備會議を召集し、以って各種主義や方法を決定することが必要である。我々が提起している予備會議は、以下の団体、即ち各省実業、商業、教育機関、大学校および学生連合会の代表で組織したものである。予備會議の代表は各団体から選ばれるべきで、あまり多くなく、會議の進行に利するものでなければならない。国民會議の会員は、上記の各団体から直接選出された代表で構成すること、軍隊もまた代表を選んで国民會議に列席させることが必要である。その上で、国民會議の成功という観点から政治犯を大赦する。全国人民と団体に宣伝と選挙の完全な自由があるようにする。また皆がその必要に応じて、任意に国民會議に建議することができるようにする。13年来、わが党は一貫して国民革命運動のために三民主義をその基礎としてきた。最大綱領とは、三民主義を合せ一にして実行するものである。党から国民會議に提出し、国がこれを受け入れ実施するようにしよう。最大綱領を国民會議に提出し実現するよう、特に最小綱領をここに述べて宣言書とする。<sup>26)</sup>

さて、この「宣言書」は、国の内外に関わる目指すべき運動の意味を示し、目前の目標を明確にしたものとして重要である。しかも、この国のあるべき姿を6項目にわたって指摘し、これを阻んでいるものを打破することこそが目前の目標であり、従って「最小綱領」だと主張している。そして、現状を分析すれば、現在は「好機」であり、この好機を生かして国民自身で決することが必要であると述べている。「好機」であるゆえんは、吳佩孚が去ったいまこそ、という指摘である。したがってこの宣言は、天津を中心に北の都市にむけて呼びかけたものであろう。馬千里らが、即日、国民會議を發起したのは、この呼びかけに応えたものであった。そして、この日を契機として馬千里の「日記」には、「国民會議」という語がたびたび記されるようになる。それは、国民會議の開催という目標が天津各界各層に共有され、全体を束ねる共通の目的とされ、現実に運動が展開されていったからであり、馬千里がその中心に位置していたからであった。12月18日の準備会席上、馬千里は、各団体がそれぞれにこの

件を討議し、賛同し、発起人の列に加わってほしいと提起している。その結果、この日には、天津学生聯合会、学術演講会、反帝国主義運動大同盟、馬克思学説研究会など21の団体が加入し、27日の国民会議促成会準備会には100余名が参加し、40余団体が加入した。この席では、馬千里、江著元、張寺農、于方舟、鄧穎超の5人が「章程」及び「宣言」の起草者となったのである<sup>27)</sup>。

ここに改めて、この12月の日々と孫文來津のもつ意味を総括すれば、確かに孫文は、31日の日記にあるとおり、天津市民の前にはほとんど姿を現すことなく北京へと去った。だが孫文を迎えるに先立って、大きな「期待」の中で育まれた合作の実体化や政治主張の共有は、その後の運動の基盤をつくりあげたし、病により接し得なかったものの、孫文の発した「宣言書」は天津の運動のまさに指針となった。12月31日、孫文を送る駅頭の人々が持つ旗幟のなかに「国民会議万歳」とあったことは、まさしくその中心点が何処にあったかを示すものであり、孫文來津の影響が少なくなかったことを物語るものである<sup>28)</sup>。

そこで、以下には、ここに始まる天津の国民会議促成会運動が、この後どのように展開されたか、その特徴は何であったかなどを、「馬千里日記」を中心にして辿ってみることにしたい<sup>29)</sup>。

## 2. 天津国民会議促成会の成立—1925年1月

1925年、新しい年が始まったが、馬千里は元旦から忙しかった。天津国民会議促成会の成立が大詰めを迎えていたからである。

- ・ 1/1 午後2時県教育局へ行き、江著元、于方舟、鄧穎超と「天津国民会議章程」及び「宣言書」について検討した。夜、李散人の招待により皆で晋陽楼へ行き、食後、学界倶楽部で国民会議促成会準備会を開いて「章程」について討論し、「宣言書」を決めた。
- ・ 1/3 夜、学界倶楽部で国民会議促成会成立大会を開いた。委員35名を選出した。江著元、宋則久、鄧穎超、王南道と私が総務委員となり、私が主席となった。12時まで討論して散会した。

こうして1925年1月3日、天津では国民会議促成会成立大会が開催された。上記「日記」から明らかのように、この日の成立大会と、そこで採択された「章程」、「宣言」、「呼びかけ」などは、12月8日の国民会議促成会の発起以来、馬千里らが討議を重ねつつ収斂させてきた彼らの考え方の全体像であるといえよう。そこで、以下にそれらを示しておくこととする<sup>30)</sup>。

(1) 大会は、先ず「天津国民会議章程」を採択した。

(1条) 本会は天津国民会議促成会と名付ける。

(2条) 本会は国民を激励し、政府に督促して早

期に国民会議の宗旨とするところを実現する。(3条) 当分の間本部を天津教育会におく。(4条) 本会は天津の各種団体の中で本会の宗旨に賛同するものを以て構成する。(5条) 各団体から各2名を代表として代表大会に出席させ、そこで本会の方針を決定する。(6条) 代表大会から35名を選んで委員会を組織し会務の一切を総括する。(7条) 委員会から5名を選んで総務委員とし、本会の代表とする。(8条) 委員会は宣伝委員12名、文書委員4名、交際委員8名、事務委員6名を選び、それぞれ互選で主任を置く。(9条) 全体委員会は半月毎に開く。大会の開催はここで決定する。(10条) 大会及び委員会の主席は総務委員が輪番でこれに当たる。(11条) 各団体は1元の入会金を納め、これを経常経費とする。必要なときは寄付を募る。(12条) 本章程は代表大会で修正することができる。

(2) 続いて大会は、全国の報館、商会、工会、農会、学生聯合会及び各団体に向けて次のように通電した。これが「日記」にいうところの彼らの「宣言書」であろう。

「民国が成立して以来13年、(わが国は) 外からは帝国主義による不平等条約に拘束され、内では軍閥による混乱や戦火によって苦しんできた。国事は正しく行なわれず、民生は日々逼迫する有様である。その根本原因を推し量るに、それはまさしく人民の存在を考慮の外に置き、それを重んじていないところにある。蓋し帝国主義と軍閥の利害のうちで、人民のそれと衝突しないものはない。彼ら二者の利は民にとっての害なのである。彼らが自らの利を犠牲にして民の利を図ることなどはあり得ない。故に人民は、自らの幸福を謀らんとするならば、自ら努力しなければならない。いまや直系の悪炎は息みつつあり、軍閥たちも終焉のときをむかえている。国民の呼び声は全国に広がっている。救国の道は全民が力を合わせることにあり、その計画は既に定まっている。この上は、我々の勇氣如何こそが国家の前途を定める鍵である。我々天津の60余の団体は、自らの権利と義務のために国民会議促成会を発起した。同胞を励まし、この道をすすめ、救国済民の国民会議が実現するよう最後まで努める。願わくば全国民が奮闘されんことを。天津国民会議促成会」

(3) 次いで大会は全国各地の国民会議促成会に向けて全国組織の結成を呼びかけた。

「孫中山先生が国民会議の召集を提唱されて以来、各地には多くの組織ができた。みな国民会議促成会の組織であり、それは中国の民治の前途に大きく関わるものである。その成功のためには、各地の民衆が一致団結して奮闘することが不可欠である。今各地には促成会の組織があるが、それらは

散在していて運動の前途に不便である。本会は、北京が政治の中心であることをもって、各組織が代表を派出して北京で総会を開き、力を集中していくことを提唱する。天津国民会議促成会]

(4) そして大会は、各県の公団、私団、法団に通電し、国民会議結成の主旨ともいふべき以下の文を送ることとした。これも「呼びかけ」とみてよいであろう。

「近13年来、国は乱れ、実業は振るわず、民生は苦しく、兵災匪禍が多発した。なぜこのようなことであったのか。それは、外国帝国主義が利を求めて争い、傀儡政権を使ったからであり、国内では軍閥が覇を求めて争ったからである。列強が勝手気ままにするのは不平等条約があるからであり、軍閥が専横なのは帝国主義が後ろ盾に居るからである。不平等条約があるかぎり国難は已むときなく、軍閥が倒れないかぎり人民は生きがたいのである。孫中山先生は、民国13年11月10日、国民会議を召集して国是を解決し、一切の不平等条約を廃棄するのだと宣言した。ゆえに、国民会議の召集に先立ち、先ず予備会議を開いて会議の基礎条件や召集時期、選挙方法をきめることが必要である。(中略) 国民会議は民に出、民が決するものである。全国各界はこの民権の伸張に対して力を尽くさねばならない。各省各地に国民会議促成会の組織を設け、政府を監督し、同胞を励まし、民衆自身の利益のために奮闘しよう。」

では、以上の「宣言書」や「呼びかけ」からは何を見て取ることができるだろうか。

ここには、先ず何よりも不平等条約体制下にある中国の現状認識と、そこからの脱却の必要性が繰り返し述べられ、その上で、今なすべきは国民会議の開催であることが表明されている。しかもその主旨は、挙げて、孫文による11月10日の「北上宣言」と、12月8日に天津で出された「宣言書」を土台としているものであり、求むべきは帝国主義と軍閥の時代を終わらせることだと主張している。そして、そのためには必ず民治が行なわれなければならないこと、国民が自身で奮闘しなければならないことが明示され、その点で、まさしく国民主権を重視する国民革命の形であると考えることができる。またこのときの運動の特徴はといえば、従来共産党系、国民党系などの系譜による差異がさまざまに指摘されている事態に比べて、党派色が少なく、むしろそれらが会合したところで展開されているようにみえる。そしてその理由は、天津の運動が馬千里に代表されるような、党派から距離をもつものによって中心的役割が担われていたからではないかと推測される。また、更に一点注目される場所は、この会の中で「段祺瑞による善後会議はまやかしにすぎない」という発言があったことである。時を同じくして展開された善後会議との関係は重要であり、この点

についてもその経緯はみておかねばならないであろう<sup>31)</sup>。

### 3. 国民会議促成会全国代表大会の成立に向けて

天津国民会議促成会が成立した後、馬千里らにとって次なる目標は、上記「宣言」や「呼びかけ」にあるとおり、国民会議促成会の全国組織を結成することであった。それは結局3月1日に成立したが、その成立に至る過程を「日記」および諸資料によって簡明に示すと以下のとおりである。ここからは、その準備が高い頻度で進められていたことがわかるであろう<sup>32)</sup>。

- ・ 1月5日 国民会議促成会宣伝工作会議、各所での宣伝活動を決定
- ・ 1月7日 学界倶楽部で国民会議促成会総務科委員会、交際委員会を開催
- ・ 1月8日 天津婦女国民会議促成会を開催、鄧穎超が議長
- ・ 1月10日 国民会議促成会全体委員会を開催、18名が出席、宋則久が議長<sup>33)</sup>
- ・ 1月11日 天津婦女国民会議促成会公開講演会、江著元が講話
- ・ 1月14日 国民会議促成会及び同総務科委員会を開催、江著元が議長
- ・ 1月17日 国民会議促成会委員会を開催、北京の組織総会に参加することを決定
- ・ 1月30日 国民会議促成会が婦女工作のため鄧穎超を北京へ派遣
- ・ 2月14日 教育会内で国民会議促成会代表大会を開催、鄧穎超が議長
- ・ 2月15日 国民会議促成会講演会、王南復が議長、江著元が講話、100余名が出席
- ・ 2月18日 国民会議促成会総務科委員会及び主任聯席会議を開催、組織化がテーマ<sup>34)</sup>
- ・ 2月20日 国民会議促成会は馬千里、江著元、于方舟らを北京へ派遣、総会工作
- ・ 2月21日 国民会議促成会代表大会を開催、50余名が出席、鄧穎超が議長、委員会で検討してきた章程の修正、委員会の増設などを決定
- ・ 2月22日 天津婦女国民会議促成会全体委員会を開催、国民会議への加入を決定
- ・ 2月25日 国民会議促成会を開催
- ・ 3月1日 北京において全国国民会議促成会総会が成立、各省団体代表60余名、参加者1000名以上が出席
- ・ 3月5日 国民会議促成会のために講演
- ・ 3月7日 「婦女国民会議促成会伝単」を発出
- ・ 3月10日 北京で国民会議促成会全国代表大会を正式に開催、鄧穎超が参加<sup>35)</sup>。東宣講所で国民会議促成会のために講演
- ・ 3月14日 国民会議促成会を開き孫中山追悼会について相談
- ・ 3月22日 国民会議促成会の主催で孫中山追悼式

を開催、馬千里が主席

さて、上記経緯をへて1925年3月1日、北京の北大礼堂において国民会議促成会全国代表大会が開催された。大会には雲南、貴州、青海、西藏以外の19省区の各団体から60余名の代表と1000名以上の参加者が集った。天津からは馬千里、李散人等が出席し、来賓は汪精衛、李大釗、林子超（林森）、徐季龍（徐謙）など数十人に及んだ。大会では、これまでの準備過程について報告がなされ、来賓が挨拶し、最後には軍楽隊が演奏し、みなが起立して国民革命歌を歌い、「打倒帝国主義」、「打倒軍閥」と叫んで終わった<sup>36)</sup>。そして、この総会について伝える『大公報』の記事は、特に、報告の中で言及された善後会議との関係については、大会席上以下のように説明されたと伝えている。即ち、1月、2月の準備会議においては、(一)各地の促成会代表からの意見によって、みな孫文による「筱電」の主旨と孫文の主張に賛同であった、(二)政府に対し、孫文の意見を容れて善後会議に人民団体を加入させよと督促した、(三)もし当局がこの意見を容れないなら、人民は自らの意志で国民会議予備会を召集するとした、と報告したのである。これは、国民会議にとって、善後会議との関係をどうするかが極めて重要な問題であったことを示すものであろう。以下には、善後会議との関係も含め、この成立大会に至る過程の特徴ともいえる点を3点述べておくこととした。

第一は、上記のように、成立大会でも強調された善後会議との関係についてである。ここに言う孫文の「筱電」とは、遡ってこの年1月17日に、北京で静養中であった孫文が段祺瑞に通電して求めた2項からなる要求のことである。それは、その時点で、近く開催されようとしていた段祺瑞主催の善後会議に対して、①同会議に各種団体の代表を参加させること、②同会議で討議したことについては、その最終決定を国民会議の場に委ねること、という2項を要求したもので、この2項が適うならば善後会議を認め賛同する、と表明したものであった。この方針の変更については、金子肇氏も、孫文が、国民会議の実現を、人民団体代表による国民会議準備会の開催を通してと限定せず、その間に善後会議を経由してもよいと認めたことであり、実質的に段祺瑞に妥協したものだとしている<sup>37)</sup>。実際、この「筱電」を契機として、国民党のなかでも、共産党のなかでも、善後会議に参加したうえで、その席を自分たちの綱領の宣伝と意見の開陳の場にしようとする機運がうまれた。段祺瑞もこの申し入れに対しては、彼らを専門委員として遇するという方法で対応した。但し、現実には、この方向転換は長くは続かず、2月に入ると国民党中央執行委員会は再び善後会議反対へと方針を転換し、それを2日及び10日に全国へ向け通電した<sup>38)</sup>。しかし、こうした短期間におこった方針の変化は、各地に混乱を招き、結果的に各省団体や省議会のなかには、その代表が敢えて善後会議に出

席して活動するという事態を生んだ。そうした状況は馬千里の周辺でも見ることができる<sup>39)</sup>。即ち、2月5日の「日記」には「直隸省教育会委員の李体乾と張仰が善後会議に行きたいと希望したが、私は善後会議に(代表を)送ることには反対だと手紙を書いた」とある。また、2月14日、天津国民会議促成会第二次代表大会が県教育会内で開催された際、5件の議案が討議されたが、その一つが「省農会会長による善後会議への参加の件」であった<sup>40)</sup>。そして討議の結果、「善後会議への参加は国民会議の宗旨に反するにも拘らず、なぜ参加したのか本人に回答を求める」と決議したのである。この時馬千里は教育会代表として教育会が善後会議への参加には反対であることを報告していた<sup>41)</sup>。このように、天津の国民会議促成会の中では、善後会議への参加の可否が少なからず問題化されていたし、馬千里自身はこれを認めていなかったのである。それは、おそらく、1924年以来、孫文が善後会議に対してとってきた「大衆的基盤を欠くもの」という見方に馬千里が同感していたからであろうと思われる<sup>42)</sup>。

第二に、この段階のもう一つの特徴ともいえるべきことは、上記のように国民会議促成会の運動が全国組織の形成に向けて大きく盛り上がりを見せたことのみならず、丁度この時期、基層に向けても、さまざまなレベルで組織化がはかられていたことである。特に馬千里はこの方面を担当し、国民会議に関わる人民団体の「組織辦法」を検討し、特に各県に連絡して県下の人民団体の組織化を進める役割を担っていた<sup>43)</sup>。また更に、一都市を越える規模の連携ともいえるべき京津浦漢粵特別市促成会の結成を働きかけることもしており、多面的な活動を見せていたのである<sup>44)</sup>。そして、この県など地方組織を強化する方向は、馬千里にとって、この後の活動の一つの核になるのである。

第三は、この運動に伴って天津婦女国民会議促成会の組織化が進められたことである。天津は五四時期においても鄧穎超、郭隆真、張若名らの存在が示すように、もともと女界の運動が盛んな都市であった。そして馬千里が、そうした女性たちの運動に対して強力な支援を行ってきたことは、すでに前稿及び前々稿において述べたところである<sup>45)</sup>。

天津婦女国民会議促成会結成への準備が始動したのは、1924年12月10日のことであった。南開女子中学で準備会が開かれ、同14日には会章の基本内容が定められ、早くも12月21日には成立大会が開催されて、鄧穎超が総務股長、陳祖香が交際股長をつとめることとなった。この速やかな組織化にみられる機動性の高さは注目に値するものであろう。そして1925年に入ると、先の年表に記したように、女性による運動は確実に全体の運動の一角を占め、これまでに述べてきた国民会議運動と連動した動きを見せるのである。2月1日に北京の国民会議促成会に出席した鄧穎超が、その席で婦女国民会議促成会の全国組織の形成を呼びかけていることなどその例であろう。しかも鄧穎超ら中心的メンバーは女性たちの運動のみにとどまらず全体の

国民会議運動においても主導的位置を占め、多面的な活動を行なうという特徴をみせていたのであった<sup>46)</sup>。

#### 4. 孫文の逝去と天津国民会議促成会その後

1925年3月1日、全国国民会議促成会総会が成立し、その後は3月10日の正式大会をはじめとして、4年半ばまでに8回にわたる会議が開かれた<sup>47)</sup>。だがこの間の天津の運動の特徴はといえば、中心となる全国大会が成立した後は、むしろこの主旨を広く基層に広めていくことが肝要だと考えによって、地域における講演宣伝活動を強化するところに重点があった。馬千里自身、率先して3月5日には西宣講所で講演を行ない、10日には東宣講所で同じく講演を行っている<sup>48)</sup>。事実、7日に開かれた天津国民会議促成会では宣伝委員を務める于方舟が、先週から宣伝工作が始まっていること、火曜日には東宣講所と河東宣講所で、木曜日には西宣講所で、そして土曜日には北宣講所で、講演活動を行なうこととしたこと、その活動は既に始まっているが極めて活気があることを報告している<sup>49)</sup>。

だが、このような活動のさ中、3月12日に孫文が逝去した。そして馬千里らの活動は、暫しの間、以下のように孫文追悼会の開催に集中する。そして、追悼会以後、「日記」には「天津国民会議促成会」という言葉は記されなくなるのである

- ・ 3/14 8時、国民会議促成会を開き孫中山追悼会のことを相談した。そして日曜日の午後、東宣講所で追悼会を行なうことを決めた。教育局は各男女小学校に通電して、今日から旗を半旗とし、哀悼の意を表するよう伝えた。
- ・ 3/22 天津国民会議促成会は午後2時から6時15分まで孫中山追悼会を開催した。私が主席を勤めた。演説者は宋則久、李伯勳、宋朝義、王卓忱、李逸安らであった。
- ・ 4/18 (天津市民団体追悼会) 朝8時、安徽会館へ行った。10時半になると、小学校生徒、女子師範学校学生、付属小学校生徒などが陸續とやってきた。

この4月18日の天津市民団体追悼会は、3月以来、馬千里らが中心となって準備してきたものである。その準備会では、宣伝隊を組むこと、事前に100万枚のビラを配布すること、追悼会の席上では孫文の革命主義の演説などをテープで流すことなどが決められていたが、このテープレコーダーは馬千里が楽達仁から借りて用意したものであった<sup>50)</sup>。そして、この日追悼のために集った市民は10余万人と報じられており、極めて盛会であったことが察せられる<sup>51)</sup>。

だが、先述したように、「馬千里日記」から見る限り、一連の追悼会のあと、国民会議促成会運動は馬千里の身辺から急速に遠のいていったようである。この後、この年の「日記」には、もはや「国民会議促成会」なる言葉が記されることはなく、それが次に「日記」

に登場するのは、翌1926年2月19日、21日、25日、3月7日の4日間なのである<sup>52)</sup>。しかもこれは、江若元が馬千里のもとへやって来て、もう一度国民会議促成会を復活させようというのだが、応諾して開会してみたものの、集まりが悪く成立に至らなかったという事態である。従って、25年春以降の状況が、天津における運動の急速な沈滞なのか、それとも「日記」に記されないのはあくまで馬千里の個人的状況であって、他の団体や党派においては活動が継続されていたのか等については、現段階で結論づけることは難しい。但し、では馬千里はこの時から何に活動の中心を移したのかといえ、それは先に触れたように、県など地方組織を強化する活動であった。

おそらくその理由の一は、馬千里が、1925年2月10日の県議会選挙の結果、1288票を獲得して県議会議員になり、教育参事にもなって、地方政治に深く関わることとなったからであろう<sup>53)</sup>。「日記」をみても、日常生活の中で、教育局に行くことが多くなり、地方自治について講演することも増えている<sup>54)</sup>。またそうした傾向のまま、自治講習所の研究会議の成立に尽力したり、県議会や県参事会の規則や細則の起草にも当たっている<sup>55)</sup>。そして、そうした立場のなかで5月7日の国恥記念日の運動や、五・三〇事件関連の運動にも対応している<sup>56)</sup>。つまり馬千里にとっては、前年来、孫文の主張をうけて天津国民会議促成会の成立と全国国民会議促成会総会の成立を実現した以上、その継続と言う意味も含めて、次の段階としては、運動の中で求められ、自らもその必要を認識した地方の組織化に向けて活動しようと考えたのではないだろうか。そして、この点を裏付ける言葉が、5月15日の天津婦女国民会議促成会全体委員会において主席をつとめた鄧穎超の発言の中にある。「5月上旬は、各記念日などの工作で忙しかったので、我々の会の運動は表面上消沈したかのようであった。また国民会議の声浪も低落したかのようであった。だが真実はそうではない。そうではなく、(現今の状況は)力を集中し、組織を統一し、国際国内問題を十分に研究し、その成果を各地で下級に向け普及宣伝しているのである。それは真の国民会議を実現するには、国民革命の成功をもってしなければならないからである。」<sup>57)</sup>この言葉が物語るように、馬千里の活動も含めて、天津における国民会議促成会運動は、国民革命の先がけとして、むしろ基層にむけて運動の展開を求めたのだといってよいであろう。

以上に述べたことから、少なくとも「国民会議」と規定された運動が、1924年秋から1925年春にかけて、天津において継続的に行なわれ、馬千里が深くここに関わっていたことがわかるであろう。その特徴の一は、その初期運動が専ら孫文歓迎と表裏をなして進展したことであった。馬千里の「日記」からみても、24年12月3日までの間は、参加者たちがみな、孫文の來津を鶴首して待つといった心情であったことが察せら

れる。また馬千里をはじめ運動に関わった人たちは、この運動が孫文の提唱であったことを重視しており、天津の運動がその呼びかけに応えたものであることを繰り返し述べていた。従ってこの時の運動は、総括すれば、「北上宣言」にいう「国民の力を結集し、その力で不平等条約を破棄し、軍閥政治に終止符を打つため国民会議を開く」ことを目的として展開されたということができよう<sup>58)</sup>。そしてこの考え方は、民国以来の諸運動や、国民党、共産党の政策のなかでも共有されていたのであり、それが国共合作の形に媒介されて実現に向かったということであろう。天津においてそれは、かつて行なわれた国民大会の経験もあり、馬千里をはじめ天津市民にとって容易に受け入れられるものであった。その故に、ひとたび「国民会議」が目標化されると、これこそが人々を結集する運動の核になったと思われる。したがってそれが、鄧穎超のいうように、25年春以降、天津において基層から深化したかどうかをみるのが次の課題となるであろう。

### 注

- 1) こうした経緯の詳細については、既にも前稿「馬千里日記考(2)」『放送大学研究年報』24号、2008、及び前々稿「馬千里日記考(1)」『放送大学研究年報』23号、2007で明らかにした。
- 2) 菊池一隆「国民会議を巡る政治力学」狭間直樹編『一九二〇年代の中国』汲古書院、1995
- 3) 坂野良吉『中国国民革命政治過程の研究』校倉書房、2004、150頁。坂野氏は国民会議運動の系譜、特に孫文サイドおよび中共サイドの動きを跡付けているため、国共合作期における両者の有り様が把握できる。
- 4) 「孫中山対時局之宣言」(「北上宣言」)『申報』1924年11月18日。[http://www.sysu.edu.cn/sun/YFhall/workv\\_cont.html](http://www.sysu.edu.cn/sun/YFhall/workv_cont.html)より参照。
- 5) この国民会議のもつ性格については前掲菊池論文38頁参照。また構想への影響関係や共産党の主張、上海や北京における諸運動との関係については坂野氏がそれまでの研究をまとめている。前掲坂野著書151頁参照。
- 6) 前掲坂野著書152頁、154-56頁参照。
- 7) 前掲菊池論文30頁参照。
- 8) そうした国民会議運動の展開については、前掲坂野著書や菊池論文のほか、金子肇「一九二〇年代前半における各省「法団」勢力と北京政府」横山英編『中国の近代化と地方政治』勁草書房、1985、野沢豊「第一次国共合作と孫文——国民会議の運動を中心として——」辛亥革命研究会編『中国近現代史論集』汲古書院、1985など参照。
- 9) この時期の政治状況に関しては、上記注8の他、北村稔『第一次国共合作の研究』岩波書店、1998、味岡徹「民国国会と北京政変」中央大学人文科学研究所編『民国前期中国と東アジアの変動』中央大学出版部、1999、狭間直樹『1920年代の中国』汲古書院、1995など参照。
- 10) 同時期の天津の状況と言論界特に『新民意報』をめぐる動きについては前掲拙稿「馬千里日記考(2)」参照。
- 11) 孫文の状況や上海を中心とする運動については前掲野沢論文参照。野沢氏によれば、上海ではこの運動の中

で国民会議予備会議条例が制定されて多くの団体が選出団体とされた。また国民党が多くの団体を加えるようにしたため、多くの団体が加わったという。これは第一次大戦以後の中国の経済発展の中で生じた職業団体の連合を目指したものであったと考えられ注目される場所である。

- 12) 「日記」1924年10月25日。
- 13) 『東方雜誌』第21巻23号「時事日誌」『中国大事記』参照。
- 14) 「在上海新聞記者招待会的演説」(1924年11月19日)
- 15) 「在神戸歓迎会之演説」(1924年11月25日)では繰り返し国民会議に言及し、なすべき目標は偏に国民会議の成否にかかっているとし、その組織法にまで触れている。
- 16) 前掲坂野著書154-160頁。
- 17) 11月22日、共産党北京区委は「檄告国民」を発表し「ただ国民会議のみが現在の時局を解決できる。唯国際帝国主義の侵略と軍閥の圧迫に継続して反対することによって大多数の人民の自由を得ることが出来る。工会、農会、教育会、学生会、商会など人民自身の組成になる全国国民会議によってこそ国事を討論し、真の民治を行ない、真正なる憲法と政府を生み出し、平和、独立、自由の中国の建立を可能にすることが出来る」と主張した。中共天津市委党史資料征集委員会編『中共天津党史大事記』天津人民出版社、1991参照。
- 18) 前掲『中共天津党史大事記』参照。ここに中心的位置を占める江著元とは、早期の共産党員で、1924年国民党第一回全国代表大会の際中央候補監察委員として天津における共産党組織の建立にあたった人物である。彼は孫文北上を契機として北方の情勢を進展させるためイギリス租界に国民党直隸省臨時執行委員会を置き活動した。但しこの時は国民党特派員として参加したのであり、その点は于方舟(于蘭渚)も同様である。
- 19) 「歓迎中山第二次籌備會議記」『大公報』1924年12月1日。
- 20) 同上。
- 21) 同上。
- 22) 葛培林「孫中山先生第三次來天津紀実」『天津文史資料選輯』37、1986、15頁。李宝榮「回憶孫中山先生在天津的情景」同25頁。齊植路「孫中山先生的三次天津之行」同1頁。
- 23) 天津図書館編『「益世報」天津資料点校匯編(一)』(「益世報」と略記)天津地方志叢書、1924年12月5日。
- 24) 前掲齊植路文、11頁、同李宝榮文、26頁。
- 25) 葛培林「孫中山先生第三次來天津紀実」『天津文史資料選輯』37、1986、18-20頁。
- 26) この「宣言書」にいう「国民党の提起」とは12月6日に出されたもので、「国民党直隸省党部と市党部の名をもって、孫文に対し、三民主義、五権憲法、政治綱領を実現するほか、国会の解散、不平等条約の撤廃、一切の苛税および不法な法令の取消しなどを実現するよう求め、そのために国民会議を開くよう要請した」と思われる。前掲『中共天津党史大事記』1924年12月6日参照。
- 27) 前掲葛培林文、21頁。
- 28) 同上23頁。
- 29) この後、日記に直接「国民会議」or「国民会議促成会」という言葉が書かれているのは以下の日々である。1925年；1月1日、1月3日、1月7日、1月10日、1月14日、2月21日、2月25日、3月5日、3月10日、

- 3月14日、3月22日。1926年；2月19日、2月21日、2月25日、3月7日。
- 30) 「国民会議促成会簡章与通電」『大公報』1925年1月6日。
- 31) 同時期、北京においても北京国民会議促成会の成立大会が開かれた。この席には汪精衛が出席し強いメッセージを送っている。それは国民会議に対する10項目からなる一段と広範な、具体的な要請を盛り込んだものであった。天津のそれと対照するため、ここに採録する。／1、一切の不平等条約の廢除、領事裁判権の取消し、海関と租界の関税を回収すること。2、治安警察条例及び罷工刑律の廢止、人民の集会、結社、出版、言論、罷工の絶対的自由。3、督軍、督理、督弁、都統、檢閱使、護軍使、宣撫使、師長、軍長などの職を廢止すること。常備軍は50万人までとすること。兵士の生活と教育を改良すること。4、税の最高限度額を制定すること。賦課税を取消し、農産品と生活必需品の価格の安定をはかること。5、労働者の仕事と賃金について規定し、労働者の生活を改善すること。6、戦争による財産被害に対し賠償すること。7、塩税、米税及び各城市郷鎮の厘金牙税を廢止すること。8、知識階級の失業や青年の失学に対し保障すること。教育経費の完全独立をはかること。9、女性が法律的、政治的、教育的、社会的地位の上で男性と同じ平等な権利を享けること。10、省長、県長、市長は民選とし自治を励行すること。／ここには天津の宣言にはない幾つもの主張が含まれている。要は、基底をなす共通した部分に、国民革命にむけたそれぞれの希望が盛り込まれているということであろう。「北京国民会議促成会成立大会之盛況」『大公報』1925年1月7日。
- 32) 本年表作成に当たっては以下のものを参照した。「馬千里日記」、『二十世紀初天津愛国教育家馬千里先生』、『天津文史資料』、『大公報』、『益世報』天津資料点校匯編(一)、『天津通志』、『中共天津党史大事記』等。
- 33) この日、会議への出席者は宋則久、張寿晨、馬千里、潘樂天、史漢清、閻竣鐘、呂職人、李鳳和、馮紹異、陳祖香、安幸生、宋朝義、王南復、朱子、江韻清、翁訓など。実際の会議の運営にむけて、様々な組織上の部門の細則を決定している。また北京からの呼びかけに応ずること、報館に報道を要請すること、講演会を開催することなどを定めた。だがここで特に注目されるのは、本会議の名において明確に善後會議に反対していること、その旨を孫文、段祺瑞、各界に打電していることである。『大公報』1月12日参照。
- 34) この段階の特徴ともいべきことは、さまざまなレベルにおける組織化を進めようとしていることである。馬千里がこれを担当し、各県下の人民団体の組織化を図ったり、より広域な組織との連携をはかって京津浦漢粵特別市促成会に代表を派遣することを決定している。またこの時期の『大公報』には国民議後援会の開催や国民議協進会の開催も伝えられており、早く全国統一聯合会を結成しようという呼びかけがなされている。「国民議運動之熱鬧」『大公報』1925年2月16日、「国民議促成会聯席會議」同2月20日。
- 35) 鄧穎超は、この時この運動のなかで中国共産党に入党し天津地委婦女部長になった。前掲『中共天津党史大事記』65頁。
- 36) 「全国国民議促成会総会成立」『大公報』1925年3月2日。
- 37) 前掲金子論文、153頁。
- 38) 同上154頁参照。
- 39) 「馬千里日記」1925年2月5日。
- 40) 前掲「益世報」1925年2月16日、228頁。
- 41) 同上
- 42) 山田辰雄『中国国民党左派の研究』慶応通信、1980、89頁。
- 43) 「国民議促成会聯席會議」『大公報』1925年2月20日。
- 44) 「国民議促成会開會記」『大公報』1925年2月23日。
- 45) 家や婚姻などへの強い関心、女子教育への取り組み、新聞発刊に際して『星火』や『女星』など副刊を支援したことなどについて、注1の拙稿2編に述べたところである。
- 46) 前掲『中共天津党史大事記』57～67頁。
- 47) 前掲坂野著164頁。
- 48) 「日記」1925年3月5日、同3月10日。
- 49) 「民会促成会開會記」3月9日、前掲「益世報」229頁。
- 50) 「日記」1925年4月2日。
- 51) 前掲「益世報」230頁。
- 52) 「馬千里日記考(1)」の資料説明に述べたとおり、本「日記」資料は、遺族の意思により原文全てなのではない。だが、少なくとも公的な部分については採録されているとのことであり、この間の日記に「国民議促成会」が記されていないことについては確かだと見てよいであろう。
- 53) 「県議選挙之結果」『大公報』1925年2月12日。馬千里の得た1288票は第4位、第1位は時子周の1344票である。「日記」1925年2月10日、11日。
- 54) 「日記」1925年3月12日、17日。テーマは「地方自治機関組織及びそこで成すべきこと」等。
- 55) 「日記」1925年4月7日、8日、5月7日、6月7日、30日等。
- 56) 「日記」1925年6月14日等。
- 57) 「婦女民会促成会開會」(5月15日)前掲「益世報」232頁。
- 58) 「国民議」を推進しようという動きが、孫文の「北上宣言」によって大きく触発されたという考え方は、これまでの研究によって充分確かめられている。前掲菊池論文35頁。また坂野氏によれば、孫文は21年から外交政策を決める国民の意思決定機関として国民議に言及していたが、この戦術は1924年11月以前は多元的なものであり、それが「北上宣言」から諸階層の共通する目標となって運動を大きく進めるものとなったと考えられている。前掲坂野著書133頁。

(2008年11月5日受理)